

出口治明さん連続講義

「古典を読めば、世界がわかる」

第3回 2018年12月18日



『地底旅行』 ヴェルヌ

(高野優＝訳、光文社古典新訳文庫)

「空想科学小説の父」と呼ばれるジュール・ヴェルヌが 1864 年に発表した作品。
鉱物学者のリーデンプロック教授と甥のアクセルは、200 年前の錬金術師が残したメモを
きっかけに地底旅行に出る。空想には、当時の科学の知見がちりばめられている。



<あらすじ>

リーデンプロック教授が見つけた古い書物には 16 世紀に活躍した錬金術師アルネ・サクヌッセンムが残したメモが挟まれていた。そこに記されていたのは、アイスランドの山の火口から地球の中心に達した旅のこと。興奮した教授は、甥のアクセルとともにアイスランドへと向かおうとする。しかし地質学に詳しいアクセルは、そんなことは不可能だと主張する。地球の中心の温度は 20 万度のガスの状態になっていて人間が到達できるはずがない。教授も負けてはいない。地球の内部のことでわかっているのはせいぜい地表から 500 メートルくらいのところまで。科学とはつねに新しくな

るものだから、古い理論にとらわれる必要はないと主張。過去の理論をもとに侃侃諤諤の議論の結果、二人は実際に行ってみて確かめることに。

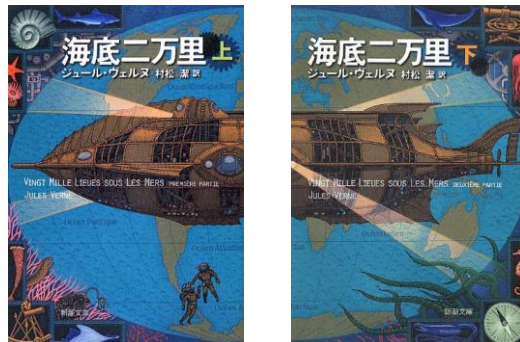
現地で雇ったガイドのハンスとともに、二人は死火山であるスネップフェルス山の火口から世界の中心へと向かう。溶岩だらけの火道を降りていく。シルル紀の動植物の痕跡、ペルム紀の三葉虫の化石、石英の結晶がシャンデリアのように連なっている。気温は、アクセルの予想に反して高くはない。最初に陥った危機は水不足だった。地下水などどこにも見当たらない。水の音を頼りにハンスが掘った岩盤から噴出したのは熱湯だった。

探検はどんどん進む。地底の海を航海し、植物や動物が出現し、海上には雲が広がっている。動物の骨や人の骨に埋め尽くされた平野を歩き、噴火に遭い、三人を乗せた筏がたどりついたのは……？ 生還を果たしたリーデブロック教授の「地球の中心は冷えている」という理論は、認められるのか。

ヴェルヌ略年譜

- 1828年 フランス西部のロワール川河畔にある工業都市ナントに生まれる。父は弁護士。
- 1840年 『ロビンソン・クルーソー』などの冒険小説を愛する少年で、未知の国への憧れから密航を試みる。
- 1849年 パリ大学で法学士号を取得するが、文学と演劇に傾倒。『椿姫』の作者アレクサンドル・デュマ・フィスと親交を結び、さまざまな作家、文化人を紹介される。
- 1856年 経済状態が逼迫し、証券取引所で働く（1866年まで）。
- 1857年 オノリーヌ・ド・ヴィアヌと結婚。
- 1859年 友人イニャールとスコットランドを旅行。
- 1861年 イニャールらとともにノルウェー、スカンジナビアを旅行。
- 1863年 『気球に乗って五週間』刊行。
- 1864年 『ハテラス船長の冒険』の連載開始。『地底旅行』刊行。
- 1865年 『月世界旅行』刊行。大型ボート購入。サン=ミシェルⅠ世号と命名。
- 1867年 弟のポールとともにアメリカへ旅行。
- 1869年 『海底二万里』第一部刊行
- 1870年 『海底二万里』第二部刊行、『月世界へ行く』刊行。
- 1873年 『八十日間世界一周』刊行。アミアンにて24分間気球に搭乗。
- 1876年 サン=ミシェルⅡ世号購入。
- 1877年 サン=ミシェルⅢ世号購入。
- 1878年 Ⅲ世号でリスボン、タンジール、ジブラルタル、アルジェへ。
- 1879年 Ⅲ世号でイングランドとスコットランドへ。
- 1880年 デンマーク、アイルランド、スコットランド、ノルウェーに旅行。
- 1881年 Ⅲ世号でオランダ、ドイツ、デンマークへ。
- 1884年 Ⅲ世号で地中海（北アフリカとイタリア）を周航。
- 1886年 Ⅲ世号を売却。
- 1888年 アミアンの市会議員に選出される。『二年間の休暇』（十五少年漂流記）刊行。
- 1905年 死去。死因は糖尿病。

出口治明さんが選ぶ「あわせて読みたい」BOOK GUIDE



『海底二万里』(上・下)

ジュール・ヴェルヌ／村松潔訳(新潮文庫)

1866年、何隻もの大型船が海上で遭遇した「巨大なもの」。鯨よりもはるかに巨大で敏捷。それは一体、なんなのか？ 生物なのか物体なのかも判然としないが、原因不明の海難事故も起きていることから、合衆国は解決に乗り出す。高速フリゲート艦エイブラハム・リンカーン号を派遣するのだ。パリ自然史博物館教授のアロナクスは、合衆国政府からの招待で、使用人のコンセイユとともに乗艦する。ところが追跡の最中にアロナクスとコンセイユ、そしてカナダ人の鋸打ちネッド・ランドは海中に放り出されてしまう。三人はいつの間にか巨大な潜水艇の上部にまたがっていた。そして艇内に拉致され、船長と面会する。ネモ船長はノーチラス号の艦内を案内。そこには厨房も、図書室やサロンもあった。科学の最先端技術を駆使し、高速移動はもちろん深海へ潜ることもできる。ネモ船長とは、一体どんな人物なのか。なぜこのような潜水艇を手に入れることができたのか。太平洋や地中海、南極と地球上の海という海を高速で移動し、アロナクスは観察した海中の様子を詳細に綴る。三人はもとの世界に戻れるのか。1870年の作品。



『フランケンシュタイン』

メアリー・シェリー／芹澤恵訳(新潮文庫)

インゴルシュタット大学で自然科学を学ぶヴィクター・フランケンシュタインは、二年間、故郷のジュネーヴにも帰らず、生命の起源に迫る研究に打ち込んでいた。生と死の境界は観念的なものと考えたヴィクターは、墓地をあさり、納骨堂や解剖室、食肉処理場から素材を集め、生命の創造に取り組んだ。その苦労が身を結んだ瞬間、彼は失敗を目の当たり

にした。生まれてきたのは、息もつけないほどの恐怖と嫌悪感を与えるおぞましい生き物であった。ヴィクターは病に倒れ、友人のクラークのもとで静養する。

その後、ヴィクター一家は、数々の苦難に襲われる。幼い弟の死、家族同然であった美しいジュスティーヌの刑死。それを引き起こしたのは、ヴィクターが生を与えたあの怪物だった。ヴィクターは覚悟を決め、怪物と対峙する。

怪物は、おのれの苦しみを告白した。どんなに善意を示しても、誰からも受け入れてもらえない境遇がどんなに苦しいものなのか。創造主であるヴィクターにすら憎まれている自分は どうやって生きていけばいいのか。怪物は、ヴィクターに自らのパートナーを創造することを求めたが、ヴィクターは拒否。怪物はヴィクターの恋人や友人にも怪物は手を下す。ヴィクターは怪物を仕留めようとするもやがて命が尽きる。怪物はヴィクターの遺体を前に再び、人々の偏見がどれほど堅固なものだったか、孤独がどれほど自身を追い込んだかを切々と語る。

1818年に発表された最初のSF小説といわれる作品。第一部に手を入れた改訂版を1831年に刊行。現在出回っているものは、この改訂版がもとになっている。

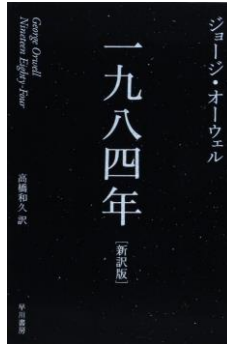


『幼年期の終わり』

アーサー・C・クラーク／池田真紀子訳(光文社古典新訳文庫)

或る日突然現れた巨大な宇宙船の群れは微動だにせず地球上空に止まり、六日目に地球総督カレランが、オーヴァーロードの意図を告げた。地球上の国境を消滅させ世界連邦を創設する。抵抗してもムダであることを誰もが理解していた。圧倒的な力の差を見せつけられているからだ。軍事力でも技術力でも知力でもまるで敵う相手ではなかった。やがて言語も宗教も通貨も世界連邦に集約されるだろう。地球に永久の平和が訪れるのか。

オーヴァーロードは時間をかけて地球を統治した。生まれた時からオーヴァーロードが存在した世代は、このやり方に疑問をもたない。50年が経過し、病気も貧困も犯罪もない世界に生まれ変わっていた。描かれているのは、そんな未来の光景。オーヴァーロードの真の目的は何なのか。地球は、人類は、どこへいきつくのか。1953年の作品。



『一九八四年』〔新訳版〕

ジョージ・オーウェル／高橋和久訳(ハヤカワ文庫)

ビッグ・ブラザーが統治する世界には、自由や意思というものがほとんど存在しないも同然だった。「ビッグ・ブラザーがあなたを見ている」という警句、「戦争は平和なり」「自由は隷従なり」「無知は力なり」というスローガンがあちこちに掲げられ、思考警察はあらゆるところに監視の目を張り巡らせている。危険思想をもつ者は容赦なく消され、危険思想の芽をもつ者も同様だった。歴史はつねに都合のいいように書き換えられるから、事実が明らかになることはない。ニュースピークと呼ばれる独自の言語は、ものごとを単純にし表現できない。類義語は削除され、言葉の数はどんどん減らされていた。

真理省に勤務し歴史を書き直す作業に従事していたウィンストンは、ジュリアと恋に落ちた。二人は逢瀬を重ね、やがて反政府地下活動グループとの接触を図ったのだが……。統治者が圧倒的な権力をもつ世界を描いた1949年の作品。巻末にはアメリカの作家トマス・ピンチョンが熱のこもった解説を寄せている。



『ティラノサウルスはすごい』

小林快次監修、土屋健著(文春新書)

恐竜のなかでもっとも人気者のティラノサウルスとは、どんな生き物だったのか。恐竜が活動していた期間全体のわずか4%の時間に、アメリカとカナダの一部の地域にのみ生息していたティラノサウルスは、それだけに見つかった化石も少数だ。サイエンスライターの著者は、発掘されたか数少ない骨格や糞の化石などをもとに、体型や走るスピード、体温や食事などティラノサウルスのあらゆる生態について考察する。

ティラノサウルスは、どうやって寝ていたのか。残された骨格は死んだ時の姿勢だから、寝ている時の姿はわからない。研究者は足跡化石から二足歩行にも関わらず前脚らしき痕

跡が見つかったことから、前脚について休んでいたことを推測する。ティラノサウルスの生態だけでなく、限られたデータからティラノサウルスの生態を考察する過程を明らかにすることで科学的思考方法もよくわかる内容になっている。

編集部便り

出口治明さん連続講義「古典を読めば、世界がわかる」にご参加いただき、誠にありがとうございます。

編集部員による少人数の運営で、いろいろと不手際もあったかと思いますが、ぜひ今後ともよろしくお願いいたします。

よろしければ、ご意見・ご感想等、以下のアドレスまでお送りいただけないでしょうか。
メールアドレス salon@gr.kobunsha.com 次回以降の参考とさせていただきます。

Facebook ページも作成しました。Facebook にて、「@salon.kobunsha」と検索していただくと「光文社【本がすき。】サロン」というページが出てきますので、ぜひ「いいね！」を押してください。

また、講義の動画配信サイトも公開しております。各回の講座を、20分～30分ほどに分割してアップしております。別途登録料がかかりますが、よろしければ一度サイトにアクセスしていただければ幸いです。

<https://salon-kobunsha.jp/>

なお、第4回は、新年1月22日（火）19時より、同じ会場で開催いたします。
出口さんにお取り上げいただく書目は、ロック『市民政府論』になります。
皆さまのご参加を心よりお待ちしております。

2018年12月18日

光文社新書編集部
Web「本がすき。」編集部
運営スタッフ一同